

山の上の生活（その1）

日本原子力研究所・理化学研究所
大型放射光施設計画推進共同チーム
加速器系グループ 田中 均

私が初めて播磨科学公園都市（以後、新都市）を訪れたのは、今から9年前の寒い冬の日であった。当時は一面山に覆われ、所々に葡萄畑の広がる静かな丘陵地帯で、今日の開発された姿など想像すらできなかった。それから数度、足を運ぶ機会があったものの、「自分がここで生活するのはまだ先のこと」と漠然と思いながら、開発されていく過程を眺めてきた。

そして、それが現実となったのが今から2年前、1993年の12月、7カ月のフランス滞在から帰国してちょうど3週間目のことである。東京から西に車で約15時間、中国地方に位置するこの地は、関西で生活したことのない私にとって、日本語の通じる外国のようなものであった。「どんな生活が始まるのだろう」という不安と「新たな生活を始める」という期待の入り交じった複雑な気持ちを抱き、私が新都市にたどり着いたことは、想像に難しくないであろう。

ここでの生活は、ある種の驚きと発見の連続であり、都会の生活とは全く異質なものである。豊かな自然を享受でき、広々とした空間を楽しむことができる反面、文化的な、また利便性への欲求を満足させることは難しい。生活を楽しむことをモットーに、ここまで過ごしてきたが、実際に生活して、特に印象に残ったこと、おもしろかったことを気の向くままに綴ってみる。

1. 山のある生活

東京近郊から来た人が、まず最初に気づくの



高台から眺めた新都市の風景。中央にSPring-8の加速器施設が広がっている。

は、風景の違いであろう。神戸以西では、生活していて、山を身近に感ずるものである。関西人が東京に来て、「ここには、山がなく、歩いていて方角が分からなくなる」と嘆いていた意味がようやく理解できた。しかし、山といっても、すぐ富士山を思い浮かべる関東人の山とは、少々イメージが異なっている。うねうねとんだらかに連なる木の生い茂った、ちょっと大きめの丘陵、そんな表現が当たっている。そんな関西の中でも、新都市は、山を楽しみ、季節を感じながらデイリーライフを送れる数少ない都市だと思う。とにかく、それは、山の中に突如出現した都市風空間であり、自然に対する人間の最前線基地といった感じなのである。

まず、ここで働く人々は、新都市への通勤途上で、四季折々の山の景色を満喫できる。新都

市の中では、山の景色を楽しむことはもちろん、昼休みや5時以降に、野草を摘むことも、クロスカントリー的なランニングも（好きな人は、少ないであろうが）、ピクニックや三原栗山に登ることだって、その気になれば可能である。三原栗山については、秋、栗も拾えると聞いたことがある。昔は、栗を人に採られないように、マムシが多いという噂を、わざわざ流した程らしい。真実を知りたい方は、是非一度、秋に三原栗山に登ると良い。その上で、状況を私に、知らせてくれれば、こんなに有り難いことはない。そして、帰宅時には、時間帯に依り、様々な山の動物とも遭遇することができる。

さて、ここで、私の気に入っている新都市周辺の山の景色ベスト5を紹介しておこう。

(a) 桜の季節の新宮から新都市までの179号線から見た景色：街路樹の桜のピンクと道路の脇を流れる小川の川辺に咲く菜の花の黄色、それに、背景の山のうす緑のコントラストが素晴らしい。山の緑の中に、遠目には、白く見える、山桜が点在し、さらに複雑かつ味わい深い景色を創生している。

(b) 秋、紅葉のころの相生から新都市までの相生山崎線から見た景色：山全体が黄色から橙の間の色々な色に染まり、その中に、たぶんうるし科の植物であろう、鮮烈な赤が点在する。さながら、自然のキャンパスと化した山の風景はいくら見ても飽きることはない。

(c) 新緑の頃の新都市と三ヶ月を結ぶ上郡三ヶ月線から見た景色：この道は、両側に、鬱蒼と杉が生い茂っている。新緑の頃は、新しく芽吹いた緑から、生臭い香りが漂ってくると見て感じ取れる程、木が空間を支配している。森林浴をしたいのなら、ここをドライブすればよい。

(d) 春の竜野白鷺山：この辺りには、山ツツジが多い。関東のツツジより小型でかわいらしい感じである。白鷺山には、山ツツジの大き



上郡三日月線から見える夏場の景色。杉の木が道路の両側を覆っている。

い群生があり、桜と違う濃いピンクが山を所々覆い、山の緑に映えて美しい。

(e) 早春のSPring-8 東門周り：人工的に植えられたオレンジ色の可憐な花（カリフォルニアコスモスという名前らしい）が、東門の脇の長尺ビームラインの丘に一齐に咲き乱れ、突然、研究所の一角がお花畑になる。この時期は、研究所に出勤するのが思わず楽しくなる程だ。

2. 動物の土地

ここで生活するようになって、都会で決して目にすることのない様々な野生動物に出会うことができた。鷹、鹿、イノシシ、タヌキ、キツネ、リス、ウサギ、イタチ等である。彼らは、比較的安全な夕方から明け方にかけて、行動が活発化するようだ。私が彼らを目撃するのは、鷹を除き、夜間で、研究所から帰宅する途中が最も多い。ここに来るまで野生動物は敏捷だ、という印象を持っていたが、遭遇して見ると、皆以外とのんびりしているのに驚いた。車のライトに目が眩むのか、そのスローな逃げ足に衝突しそうになったことが何回もあった。動物との衝突事故は結構多いらしく、道路脇に寄せられた動物の痛ましい遺体を見る度に、気持ちが沈んでしまう。

多くの動物たちの中でも、出会って楽しいの

は、タヌキである。しぐさが何処となく愛らしい。走っていく姿は、まさに動くぬいぐるみだ。もこもこした体を精一杯動かして、一生懸命逃げしていく。タヌキの個体数は、多いようで、SPring-8のリング棟の玄関や駐車場、オプトハイツの周りでもよく見かける。このタヌキを餌付けしている人がいる。オプトハイツの隣に住む姫路工業大学の関係者で、教職員宿舎入り口脇の歩道で餌をやっているようである。夜、その付近で、タヌキそれ自身はもちろん、動く光を車から目撃することが多い。タヌキやキツネの目は、車のヘッドライトで黄色や赤く光るのである。そのうち、オプトハイツ住人の間でも、タヌキに餌をやるのが流行し、一時、毎晩のように餌をやりながら、タヌキ鑑賞にふけた時期があった。人間の食べ残した色々な食べ物を与えるので、タヌキの文化度が上がっているという珍説まで登場し、タヌキも迷惑だったと推察する。今でも印象に残っている珍品は、人間の食べ残した「しゃこの殻」で、さすがに雑食のタヌキも食べなかった。

動物話が理解できたら、こんなタヌキの囁きが聞こえるかもしれない。

「全く、人間というのは、極悪非道な生き物だ。俺たちの住みかを滅茶苦茶に破壊して」

「最近では、それに加え、車なるものが、走り回ってゆっくり買物にもいけやしない。仲間も、随分あの動く凶器にやられたみたいだ。」

「でも、冬場に餌をくれる優しい人間も、稀にはいる。」

新都市の開発は、ここを住みかとしていた動物たちには、迷惑なことであったに違いない。人間の勝手な言い分ではあるが、共存共栄の道を模索できればと祈らずに



SPring-8のキャンパスに迷い込んできた三原牧場の馬。蓄積リングD棟前の草を食べているところ。撮影は島田 太平氏による。

いられない。

余談であるが、動物と言うと、どうしても研究所の個性的な人々を連想してしまうから不思議である。動物にたとえて呼ばれている人達が結構いるものだ。この由来は、見かけや性格、名前等ケースバイケースで違っている。ちょっと考えただけでも、熊や犬、やたらに威嚇する



昼休みにテニスを楽しむ人達。リング棟脇の駐車場にボールをたてる穴と白線を引いてもらいテニスコートとして使用している。

XXXや山羊が生息している。さらに、私の部屋には、漫画の主人公、「トトロ」まで居たりするから驚きである。

3. 食事情

新しく町を作った時に、案外問題となるのが、食事である。筑波学園都市でも、開発当初は、食事をするところがなく、大変苦労したと聞いている。現在、SPring-8で働く多くの人達は、お弁当を注文し、それをお昼にプレハブの会議室で食べている。おせいじにも楽しい昼食とは言いがたい状況である。

新都市には、姫路工業大学の学食を入れて、全部で3つのレストランが在り、近郊にも幾つか食事処がある。しかし、種類、味、雰囲気、値段を考えると、充実しているとは言えず、外食をした場合でも、美味しく楽しい昼食を取ることは難しい。

フランスでは、良い人材を獲得するには、まず良いカンティーン（食堂）を作ることだと言われている。彼らラテン系の人々は、食事を非常に大切にしており、気のあった友と談笑しながらおいしい昼食を取ることは、一日の中でも重要な位置を占めている。フランス人同様、私達研究者にとっても、ランチタイムに仕事中の緊張をほぐし、良い意味でリラックスすることは、午後の仕事の質を高めるうえで、重要なことである。

新都市に、このような場所が確保されていないのは、本当に不満であるが、現在建設が計画されているSPring-8のレストランに期待したい。プランでは、オープンスペースやカフェもあり、夏場は野外で食事ができる等、施設面では工夫が施されている。後は料理の質であるが、これに関しては、来年のオープンを待つ他はない。ともかく、このレストランのオープンで食事環境は、大幅に改善されそうな見通しだ。

昼食にもまして困るのが、夕食である。新都



研究者達が昼食を取るリング棟前のプレハブ棟とそのまわりの風景

市及びその近郊のレストランは大体、8時には閉店してしまうし、昼食と同じようなものを夕食として食べたくないのは、当然のことであろう。うまいものを食べるには、竜野か相生まで出かける必要があり、片道15km程の距離がある。

初め、新都市に住む独身者、単身赴任者の多くは、近くのレストランから夕食を取り寄せていた。しかし、味付けとメニューが単調なため、そのシステムは自然消滅してしまった。結局、自分で作るのが一番うまいと言うわけで、最終的にはほとんどの人が自炊をするようになった。自炊など決してしないと思っていた私でさえも。ここで生活するようになって、中華鍋をはじめ、色々な調理器具や調味料を購入し、美味しい料理を、効率よくつくれるように料理法にも工夫をこらすようになった。やはり、人間必要にかられると、何でもするようになるものである。花嫁修業が必要な若い女性をオプトハイツに入れれば、教育効果とネルトン効果があり、一石二鳥だ、と思うのだが、「そんなこと、タヌキを餌付けするように、簡単に行くわけじゃない。」と言うのが進歩的な女性陣の意見であった。

角戸 正夫
勤務先

KAKUDO Masao 大正7年7月17日生
兵庫県参与
〒650 神戸市中央区下山手通5-10-1
TEL 078-341-7711 FAX 078-362-4479



略 歴

昭和17年大阪帝国大学理学部化学科卒業、28年理学博士、35年大阪大学蛋白質研究所教授、46年同所長、53年日本学術会議会員（2期間）、日本結晶学会会長、日本化学会賞受賞、57年大阪大学退官、姫路工業大学学長、62年学長退任、兵庫県顧問、兵庫県立工業技術センター所長、平成3年勲二等瑞宝章受章、4年兵庫県立工業技術センター退任、現在兵庫県参与

著 書

X線結晶学、特にアミノ酸、ペプチド、蛋白質に関する著書、総説、論文など約270編

原 雅弘
勤務先

HARA Masahiro 昭和21年11月26日生
理化学研究所 大型放射光施設計画推進本部
〒678-12 兵庫県赤穂郡上郡町金出地 SPring-8 リング棟
TEL 07915-8-0851 FAX 07915-8-0850



略 歴

昭和50年東京大学大学院工学系研究科博士課程（原子力工学専攻）修了、同年理化学研究所入所、マイクロ波などを用いた電子ビームプラズマの計測、リングサイクロの建設、60年から大型放射光施設の設計に従事、現在副主任研究員、加速系研究開発室長、工学博士。日本物理学会、電気学会、日本放射光学会会員

最近の研究
今後の抱負

SPring-8 の設計、加速系の設計と製作
SPring-8 を加速器や光源などハードの性能だけでなく、利用し易さなどソフトの面でも世界一の施設とすること

田中 均
勤務先

TANAKA Hitoshi 昭和32年6月5日生
理化学研究所 大型放射光施設計画推進本部
〒678-12 兵庫県赤穂郡上郡町金出地 SPring-8 リング棟
TEL 07915-8-0851 FAX 07915-8-0850



略 歴

昭和57年東京工業大学大学院総合理工学研究科修了、同年日揮株式会社入社、60年理化学研究所サイクロトロン研究室特別研究生、63年同所サイクロトロン研究室研究協力員、平成元年日揮株式会社退社、理化学研究所入所、現在に至る。

最近の研究
趣 味

SPring-8 蓄積リングの高輝度化の研究
テニス、スキー、ジョギング等のスポーツを通しての自己鍛錬